タイムス
（昭和21年2月8日第三種郵便物認可）

14.21.5.13

客間の明かり

桐生倶楽部拝見 ⑥

2枚の絵に 組み合わせの妙

扉を開け、まず目に飛び込んでくるのは市松模様の暖炉であろうか。暖炉、小机、そしていすの深い茶が室内の空気を引き締めている。

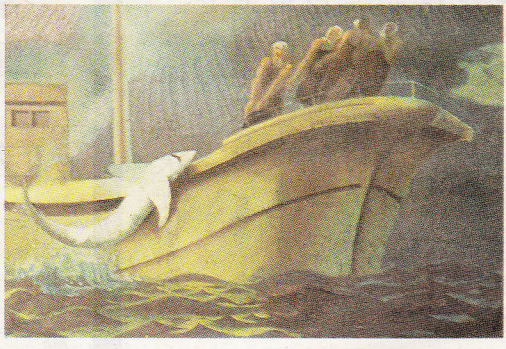
その6号室には、内田安彦がサメ漁を描いた「海に生きる!!」が飾られ、海なし県の洋館に潮の薫りを運んでいた。また、暖炉のかたわらには桐生出身の杉浦勝人が昭和初期を思わせる町を描いた「淡曇りの町」が。のんびり牛車が歩く町は桐生か、それとも作者が移り住んだ横浜だろうか。

「6号室」

桐生倶楽部の会報をひもとくと、内田の故郷、銚子は太平洋戦争の空襲で焼け野原となり、彼が桐生で個展を開いた際、戦災を受けず、昔ながらの家が並び、自然に恵まれ、友もいる桐生を「第二の故郷」と呼んだという話が記されていた。

同じ部屋に飾られた2枚の絵に組み合わせの妙を感じ、口元が緩んだ。（野）

【データ】▽桐生倶楽部＝桐生市仲町二丁目9の36、電45・2755、社員外でも社員の紹介か、理事者の承認があれば有料で利用可能▽6号室＝定員15人。半日3400円、午前9時から午後5時まで5200円、午後5時から9時まで4100円（冷暖房費、厨房〈ちゅうぼう〉使用料など別途要）。



「海に生きる!!」 内田安彦 画

昔ながらのはえ縄漁法で、海のギャングといわれるサメを捕らえ、水揚げする海の男の勇壮な姿を描いた20号の油絵。ほの暗い背景とサメの白い腹が対照的で、見る者に強い印象を残す。

画家は子どものころから絵が好きで、千葉大学を卒業後、2度、渡欧し、絵の勉強に励んだ。郷土を中心に、広大な海の顔や変化に富んだ大空、海辺の風物を描いた。